

日本文學刊行史(江戸時代)

樋口慶千代

江戸時代(徳川家康が幕府を江戸に開いた頃から、開墾が次第に進むまで、凡そ二百六十年間をいふ)以前の日本文學書は、いづれも寫本で傳はり、この期に至つて始めて開版された。そしてこの期になつてこれ等に對する研究書、及び夥しい新興文學書が刊行され、極めて多種多様に亙つてゐる。故にこの期に於ける其の刊行史を説くは、日本文學刊行史を説く事となり、これを詳説すれば際限もない。よつて限られた紙數中に其の概略を敘述する事とする。

西洋の印刷機を我が國に初めて輸入した人はアレックスandro ヴリニヤーニ (Alexandro Valignani) である。

(この人は耶穌會の巡察使であり州長である。天正十八年印度副)。當時の西洋印刷機で出版した書籍の中に、我が國文學「口譯平家物語」(この人は使節として我が國に來り、文祿元年まで滞在してゐた)。當時の西洋印刷機で出版した書籍の中に、我が國文學「口譯平家物語」(羅馬字、文祿元年)、「太平記拔書」(文祿、慶長)などがある。これ等は耶穌會が、かういふ我が國民の愛好書を出版すれば、(天草藤林刊、四卷)。

彼我が國民を互に理解する助けにもなり、且は耶穌教の宣傳にも都合がよいと思つたからであらう。其の後耶穌教が嚴禁され、耶穌會で刊行した書籍も悉く燒棄てられた爲に、其の印刷物も跡を絶つた。(其の時に災厄を免かれた刊行書は、僅めて稀な物となつて傳はつてゐる。)よつて我が印刷事業には殆んど影響を與へなかつたのである。

活字版

豊臣秀吉の朝鮮征伐によつて傳はつた、朝鮮の印刷術に準由した木活字版や銅活字版の印刷は、既に文祿の時から行はれた。其の初め小瀬道喜（號南庵、豊臣秀吉に近仕した人）・西洞院時慶卿（後國成天皇の教本を準じて、禁中で「勅」・禪僧三要（徳川家康の命によつて伏見で一孔子家を刊行した人）等が種々な書籍を刊行した。其の中には片假名交りの「信長記（南庵）」もあるが、概して漢文の本を刊行したものである。

これ等活字版の刊行書を見た民間では、假名の木活字を製作して、活字版の我が文學書をも出さうと企てるに至つた。かくて刊行された物に「徒然草壽命院抄（徳川刊語に「慶長六年癸卯季冬月九日也足親筆然」とある）」・「太平記（徳川刊語に「慶長八年癸卯季春既望富春堂新刊」とある）」などがある。

嵯峨本

この時に當つて嵯峨本が出現した。嵯峨本とは、鷹が峯の本阿彌光悦が版下を書き、其の裝潢にも彼が美術的意匠を施した光悦本、及び光悦の書風裝潢に多分の影響を蒙つてゐて、光悦本との間に識別し難い本をも、併せて稱するものが最も妥當であると思ふ。この意義のもとに現存せる嵯峨本は、「伊勢物語」・「同聞書」・「源氏小鏡」・「方丈記」・「撰集抄」・「徒然草」・「新古今和歌集抄月詠歌卷」・「百人一首」・「三十六歌仙」・「二十四孝」・「觀世流語本」・「久世舞」だけであらう。尤もこれ等には植版裝潢を異にした本もある。これを「伊勢物語」に就いていふも、(一)慶長十三年刊、(二)同年再刊、(三)慶長十四年刊、(四)慶長十五年刊、以上の四類がある。其の四類の中にも異植字のものが交つて

ゐる。それ等を數へれば余が知つてゐるだけでも、合計九種の別本がある。

嵯峨本はいづれも國文書のみであつて、漢文書のものはない。其の出版年代は慶長後半期と見るべきで、慶長十四五年頃が最も多く出版されたやうである。

嵯峨本が刊行されてからは、これに倣つて我が文學書の開版が忽ち盛んになつた。又刻書中の挿繪も、これまで佛典中に稀に見る位に過ぎなかつたのが、嵯峨本に立派な繪が挿入されてからは、この上にも一大進歩をなした。又裝潢に就いても、厚い雁皮紙に胡粉を引き、雲母を以て草花や禽獸や昆蟲などの色々の圖案模様を摺入れたものや、或は色變りの料紙を交ぜ合はせて用ひたりなどしてある。かやうに頗る光悦創意の美術的加工が施され、趣味に富んだ麗はしい物となつた。

角倉素庵（みくらそゑ）は光悦と共に我が文學書の刊行に趣味を持つて其の事業に與かつた人である。また嵯峨本を摸擬した町版も出來、又嵯峨本を版下とし或は摸刻した整版のものも作られ、これ等が入り交つてゐる。其の爲にそれ等を明確に識別するは容易でない。斯くて嵯峨本は其の影響を後世に及ぼし、我が文學書出版の上に劃期的偉大な貢獻を齎したものである。

我が文學書の活字本は、既に耶蘇會が出版した物の中にもあつたが、それと系統を異にする嵯峨本の出現によつて著しく助長された。即ち慶長の中頃から寛永に互つて、民間の書肆や無名の士が、我が文學書を木活字版で刊行した物が頗る多數に上つてゐる。物語では「伊勢物語闕疑抄」（卷末刊語に「御幸町二條」とある）、「うつほ物語」（卷末刊語に「和九年五月」、「源氏物語」（卷末刊語に「元和九年五月」、「狹衣」（卷末刊語に「元和九年五月」の類、日記では「ささよひの日記」の類、戦記では「大坂

物語」、「源平盛衰記」、「太平記」(卷末刊語に「慶長癸卯季春」)、「太平記賢愚鈔」(卷末刊語に「慶長十有貳丁未順仲夏如意」)、「平家物語」(卷末刊語に「下村時房」)、「平治物語」の類、歌書では「萬葉集」、「左大將家六百番歌合」、「四しやうの歌合」、「新古今和歌集」、「見吟三百首和歌」、「無言抄」、「匠材集」類、假名草子では「恨之介」、「一きうの水かよみ」、「めとののさうし」、「ほうぶつしう」、「四十二の物あらしひ」の類、幸若舞曲の數々、隨筆では「清少納言」、「徒然草壽命院抄」(卷末刊語に「慶長第六辛丑孟冬九日也足更素然」とある)の類、翻譯では「伊曾保物語」など、これまでの大概の我が文學書は活字版に印刷されて世に弘まつた。

これ等の版元は概して京都地方であつて、江戸でも木活字版の我が文學書が刊行されたが、其の數量は僅少であつた。

活字版は前述の如く盛んに流行した。然るに寛永頃に及んで活字版にも不満を感じるに至つた。其の譯は、平假名文字は漢字や片假名文字と違ひ、一字一字切れ切れのものとして、見た所趣味が乏しい。よつて體裁を保つ爲に、二三字又はそれ以上連續した活字を作つたのであつたが(雖本などの活字、それでは活字版として便利な字々の融通が利かなくなる。その上に當時は活字を並べて、其の間隙に紙片を詰めて印刷するといふ極めて不完全なものであつたから、整面に植えて伸び縮みや歪み曲りや凸凹が出来、又往々活字が轉び出て紛失する。(同じ活字版の中にも異種字がある。これを以て數十部を印刷する間には、詰替をせねば使用に堪へなくなる。使用後に活字を洗ひ、整理して保存するにも非常な手数を要する。これでは活字版よりも在來の整版の方が便利であると思ふやうになつた。)

文化の進歩に連れて書籍の需用を増し、民衆の娯樂慰安に關する本の出版量も年々増加し、書肆も殖える。そして民衆を相手とするには、書籍の内容が平易であらねばならぬ。其の爲には漢字に振假名を附け、挿繪を多くす

る。然るにこれ等の要件を活字版で満たすには、複雑な手数を要したのである。これ等の事情により、寛永後は活字版頃に衰へたが、後年西洋書の舶來するに及んで其の影響を受け、文政天保頃から再び頭を擡げて來た。

整版の印刷法は、刻成の板を水で洗つて表面の殘紙を去り、刷毛で墨及び諸色料を板面に平均に塗り、潤燥を適度にした紙を覆うて、之をペレンで擦るのである。

彩繪の印刷には膠漆ゴウシを引いた紙を用ひる。刷毛は馬尾の本の剛い所を以て作る。ペレンを作るには、外廓に太い捻紙繩を嵌め、中には總て擦皮の細繩を旋回して平たく渦紋形を作り、之を紙捻で編み、其の表面は糊紙で平皿のやうに貼り、その上を擦皮で包み、其の兩端を上曲げて捻り、之を麻絲で括り合はせて帶鼻を作る。其の帶鼻を手持つて使用するのである。又ペレンの底面には少し麻油を抹し、紙上を磨するに滑かなるを助ける。

版木は櫻材を用ひる。「和漢三才圖會」卷七、板彫の條に「按古之書版多以梓木彫之、故稱三編梓、其材軟易鑿而耗損、今專用櫻木、久埋土中、後取出、否則脆不_レ佳」とある。

御伽草子假名草子

御伽草子(室町時代の撰述にかゝるもの多し)・假名草子(御伽草子から浮世草子に至る間の江戸初期の草子)の刊行は江戸初期に始まり、寛文・延寶頃は其の全盛期に達した。それより後は漸次浮世草子の爲に壓倒されてしまつた。この間に刊行されたものは五百種を遙に超過するであらう。

體裁は大本・中本・稀には小本も横本もある。が寛永頃までに刊行された假名草子には大本なのが多く、表紙の様などにも意匠を凝らして立派なものが多い。挿繪は嵯峨本又は奈良繪本に倣つたものである。

これ等の草子の中には、木活字版のものもある事は既に述べた。整版では「七人比丘尼」(寛永十二年)、〔寛永十二年〕「可笑記」(子撰、萬治二年)、〔寛永十二年〕「堪忍記」(四年京版、大本)、〔寛永十二年〕「同」(寛文十一年江)、〔寛文十一年江〕「さるげんじ」(寛文頃刊の御伽草子。中本。丹繪本とは整刷の挿繪に丹繪、黄、年京版、中本)、「念佛さうし」(挿繪、豊川風、刊年未詳、小)、「薄雪物語」(享保七年大)、「御伽草子」三十(版、挿本)など是有名である。

江戸では明暦・萬治頃までは、淨瑠璃の正本・吉原に關する書籍などが盛んに開版された。寛文以後になつては、江戸の松會・鱗形屋(大塚馬)・西村(神田新)・井筒屋(通船)等の書肆で、京で刊行した假名草子などを、菱川風の挿繪に改めて翻刻する事も行はれた(馬居庄兵衛・奥村政信などの浮世繪師も、小説)。

當時は歌書、和書并假名類、連歌、俳諧、舞并草紙、往來物并手本(この分類は當時刊行の幾多の書が、新粧を凝らして開版された。これ等の書籍の刊行は京都を中心として發達し、江戸・大阪これに次いだ。

浮世草子

浮世草子の刊行は、天和二年に始まつて文政年間に及び、其の間に刊行されたもの七百餘種に上つてゐる。

浮世草子とは、當時の世相・人情・風俗などを日常の言葉をも以て描寫したものをいふ。そして大體から見て、好色物、町人物、武家物、時代物、氣質物に分かたれる。

上方では初めて浮世草子「一代男」(井原西鶴撰、天和二年大版)を開版して人氣を博した。之より續出した浮世草子の爲に、假名草子は壓倒されてしまつた。江戸でも其の影響を受けて西鶴本の數種を刊行し、又其の類の物を幾つも刊行した。

京都では八文字屋自笑・江島屋其磧作の浮世草子が、書肆八文字屋から盛んに出版された。其の挿繪は西川祐信風である。

自笑は安藤八左衛門といひ、京都狹屋町通誓願寺（六角堂）下の書肆八文字屋の主人である。淨瑠璃本・役者評判記の版元であるが、また戯作者江島屋其磧・浮世繪師西川祐信と提携して、年々新作の浮世草子を刊行した。そして八文字屋の名を成し、爲に洛陽の紙價を高からしめた。

西鶴本は大形や半紙形の本のみであつたが、其の他の浮世草子には横本もある。就中「傾城色三味線」（元禄十四年八、文字屋開版）、「風流曲三味線」（寶永二年八、文字屋開版）、「伊達羨五人男」（寶永四年京寺町通松原上、東徳備屋七郎兵衛開版）、「傾城禁短氣」（正徳元年八、文字屋開版）、「浮世親仁形氣」（享保五年八、文字屋開版）などはいづれも横本である。

俗にいふ互版の起りは元和元年五月大阪夏の役の際であつた。其の時のものに「大阪卯年圖」・「大阪安部之合戦之圖」がある。その彫刻粗放で恰も瓦に彫つて印刷したが如き觀がある。よつて互版とは、粘土面を平滑にしてそれに彫刻し、瓦に燒いて版にしたとの説もあるが、實際は矢張り櫻木版である。その印刷物を觸賣とも讀賣とも繪草紙ともいふ。當時起つた珍聞異事などを拙劣な繪畫に描いて小割書し、僅か一二枚の粗惡な小冊子である。讀賣の文章も其の彫刻も、これを賣り歩く者も皆同人であつて、文字の覺えある浪人や、放蕩に身を持崩した食詰連（くじつれん）の生活の業である。讀賣の流行に連れて弊害も生じたので、貞享元年十一月には之を禁止する布令が出で、元禄十一年二月にも同様の布令が出た。これが爲に讀賣の流行も頓挫したが、寶永頃には歌祭文となつて復興の氣運に進んだ。幕末には世間が多事であつたので、讀賣が盛んに行はれた。この讀賣は實に新聞の起源をなすものである。

社會風教に惡影響を及ぼす文學書も刊行された。之が爲に寛文以後になつて幕府は、出版事業に對し度々取締法を定め、違犯者を處罰した。これ等の取締法の爲に、印刷出版界は其の進歩發達に影響を蒙つた事はいふまでもない。

淨瑠璃本

淨瑠璃本の刊行は江戸時代の初期に始まり、繪入淨瑠璃本(丹波本及び俗に風本と稱する繪入りの細字本、それに金平本又は六段本と稱する繪入りの淨瑠璃本を併せていふ)が其の先驅をなしたものである。別に「十二たんさうし」(寛永初年頃刊か)と稱する大形な摸擬嵯峨本もあるが、これは太夫の正本でない。これ等繪入淨瑠璃本の刊行は寛永に始まり、寛文頃になつて最も盛んとなり、享保年間に至つて絶えた。其の間約百年に亙つて刊行された物は千種に上るであらう。其の版式體裁などは時代によつて多少の變遷あれども、要するにほど極つた形を備へてゐる。

これ等の繪入淨瑠璃本は、後に起つた稽古本と相俟つて、いづれも民衆に愛玩された。そして淨瑠璃その者は、歌謡及び戯曲の大きな源(おもと)をもなし、以て我が通俗文藝の上に多大な貢獻を齎したものである。

また淨瑠璃を生んだ説經節の本もこの時に刊行された。これ等淨瑠璃及び説經節の繪入刊本の現存せるものゝ中で、最も古いものは「たかたち」(行數二十三乃至二十九の讀本、寛永二年京都寺町地満寺之、前勝兵衛開版。この本は稀書館藏會の拙刻本の中にある。)、「せつきやうかるかや」(行數十一乃至十三の中形、寛永八年京都上り)、(或曰大夫正本、六段もの、行數十四、寛永十「はかや」(一年正本風西洞院通長者町さうしや太良右衛門開、)「ふきあげ」(長門謙正本、六段もの、行數十「五乃至十六、萬治寛文頃の刊か) などがあつた。寛永末から寛文頃の繪入淨瑠璃本は縦本であつて、本文に頌句音節墨譜が施して無い。そして一般に黒表紙であつた事が現存せるものによつて知れる。

風本も繪入淨瑠璃正本である。これには稽古本の如く頌句・音節・墨譜などが施してある。其の現存せる古いものでは「曆」(井原西園撰、宇治加賀謙正本、行數十八、中形本、貞享三年刊)がある。「氷の朔日」(近松門左衛門撰、宇治加賀謙正本、行數十七)などには道行文を見返に掲げてある。

江戸で金平本(坂田金平又は之と類形の武勇談を主題とした浄瑠璃本で、和泉太夫の正本をいひ、轉じて之と同型の他の太夫の正本をもいふ。これ等は主として六段物であるによつて六段本ともいふ)の開版は萬治初年頃に始まり、後に戦記物などに轉じて正徳後に及んでゐる。江戸版の金平本は小形であつて、普通十六行で十枚乃至二十枚綴である。其の出版元は吉田屋・西村屋・山形屋・鱗形屋などである。

上方で金平本の開版は江戸よりも古く、そして貞享に及んでゐる。其の版式も半紙判である。其の出版元は山本九兵衛・西澤太兵衛・鶴屋喜右衛門などである。

金平本には音譜などの附いたものと、其の附かぬものとある。挿繪は初めのものは古様粗放で、奇怪趣味の横溢したものであるが、後にはやゝ精巧になつてゐる。(精入狂言本・赤本・黒本などの形式は、これ等)の精入浄瑠璃本を母胎として生れたものである。

上方では延寶七年に大字八行の稽古本「牛若千人切」(宇治加賀孫正本、延寶己未仲夏京都二條通寺町西へ入丁山本九兵衛放)が刊行された。この本は半紙判であるが、次の年の春に刊行された「赤染衛門榮花物語」(宇治加賀孫正本、行敷八、延寶庚申孟春二條通寺町西へ入丁山本九兵衛放)には美濃紙判のものもある。後には種々な行敷の本も刊行されたが、就中七行本は後世長く浄瑠璃稽古本の形式となつた。そして稽古本は、その形式をもともと光悦の謡曲本に倣つたものであるので、其の書風も光悦風(即ち近衛流)から變形したものである。

浄瑠璃は次第に數多の流派に分れ、斯道の名匠も輩出した。従つて其の正本も流行を逐うて盛んに刊行されて、江戸文藝の上に大なる光芒を放つてゐる。就中現今も流行してゐるものは義太夫節・常盤津節・清元節である。

諸流派の浄瑠璃中で最も文藝的價値に富むものは、蓋し義太夫浄瑠璃であらう。近松門左衛門は元祿の盛時に際會し、不朽の名篇の數々を作つて義太夫文藝の爲に萬丈の氣を吐いた。其の後の作者も近松の影響を受けて名篇傑作を出し、延享・寛延頃に於ては義太夫浄瑠璃の黄金時代を現出した。我が國民精神はこの義太夫文學の側から作られてゐる事が多いのである。

歌舞伎狂言本

一九二

歌舞伎狂言本も歌舞伎劇の發展に連れて刊行されたものである。「續耳塵集」に「狂言本とて委して書く事は金子一高(通稱吉左衛門。元祿後期の作家)より始まりけるなり」とある。元祿・享保頃の狂言本は、概して浮世草子の影響を受けてゐる。

即ち内容に作者の意思が働いて、讀物的である所が多分にある。其の挿繪(上方と江戸とは差異。相違があれども)も浮世草子の繪師が描いたのであるから、いかにも浮世草子の挿繪に酷似し、舞臺圖などを示さねばならぬ事には思ひ至らなかつたのであらう。(よつて又本當の。脚本ではない)これ等の狂言本は、いづれも十丁乃至十五丁綴の半紙形一冊本であつて、二冊になつてゐるものは少い。そして當り狂言の時は、特別製の上本をも刊行したものである。

當時の刊行本「くまがへなごりの盃」(續入、行數十五、元祿七年京都。變屋町通八文字屋八左衛門新板)は黒表紙であつて、題簽に「村くまがへなごりの盃」(立役大和屋右衛門、市川團十郎いとまごり甚吾)とある。上方文字屋八左衛門とあつて、其の題簽の右に四角の稍長方形な札を貼つて、暮に紋を描き、其の下に「村山平右衛門」とある。上方版の表紙は皆この形式に類してゐる。江戸版のものも之に倣つたのであるが、一枚の大きな題簽を貼つたのみで、版元を書いてないのが多い。

これ等の狂言本の版元は、京都では八文字屋八左衛門(變屋)、正本屋九兵衛(通)、鶴屋喜右衛門(二條)、大阪では正本屋藤九郎(四角)、正本屋九右衛門(高橋橋)、江戸ではもつや十右衛門(四條)、かいふ屋(町場)、中島屋(町場)、繪草紙三右衛門(水挽)、正本屋小兵衛(水挽)、泉屋五郎八(馬場)などが其の主な者である。斯くて脚本の進歩に連れて夥しく刊行されたのである。

草 双 紙

草双紙は行成本(紙表紙の繪本で、赤本の前身である)、赤小本、雛豆本、赤本、黒本(赤本が延享初年か、青本(黒本がその後漢)から黒表紙に變る)、青本(黒本がその後漢)、黄表紙、合卷本と發達し、天和頃から幕末に至る百八十餘年間に亘つて、出版された刊行物に對する總括的名稱である。

草双紙の名の起りに就いては、本格的の草紙に對して草の字を用ひて草草紙であるのを、草双紙と書くに至つたものと云はれてゐる。(或は又、其の使用されてゐる紙質が概ね漣返しであり、なほ且惡墨の印刷であるところから惡墨を放つによつて、それから出た臭草紙の義であるとの説もある)。

行成本・赤本・黒本・青本・黄表紙などは、何れも表紙の色彩によつた名稱である。但し青本は其の實綠表紙である。其の綠から青の繩色したのが黄表紙となつて轉じたのである。又雛豆本・合卷本等は其の體裁によつた稱呼である。

草双紙は原則として毎頁文と繪とより成立してゐる。其の初期の作品の行成本、赤小本、雛豆本、赤本の頃は、繪が主で文が従であつた。それが黒本・青本となるに及んで、漸次繪と文とが對立し、黄表紙となるに至つて、完全に兩者が融合して合卷本へと推移つた。

草双紙の體裁は、一般に美濃半紙四つ折或は寸伸び半紙四つ折の紙に印刷したものであるが、赤小本・雛豆本の如きは、半紙八つ折位以下の小形のものである。或は赤本・黄表紙の中にも半紙二つ折(所謂半紙判形)のものもある。然しこの場合でも版木は大方従前通りのものである。每冊の紙數は五枚を以て原則としてゐる。冊數も赤本・黒本・青本・黄表紙の頃は一冊乃至五六冊どまりであつたが合卷本になつてからは段々長篇物が多くなり、「佐田紫田舍源氏」(この書のこと)の如きは百五十二冊に及んでゐる。そして讀本(よみほん)と酷似するに至つた。其の異なる所は、合卷物では文章を練(ね)り出す。

るよりも筋の運びを主とした點と、挿繪に於て草双紙としての本質を保持してゐるとである。又合巻本の中には半紙二つ折の大きさのものがある。これを大合巻といひ、金瓶梅大復讐宿六始（式亭三馬撰、文）（化五年江戸版）などに試みられたのが初めである（これは類本の形に）。

草双紙の表紙にはそれ／＼張外題がある。それには字題簽のみのものと、字題簽と繪題簽とのものと、字題簽と繪題簽とが一枚になつてゐるものとの三通りある。

赤本・黒本の頃の題簽は多く一色であつた。青本・黄表紙になるに及んで錦繪版畫の影響を受け、漸次數種の色を用ひた錦繪様のものになつた。これが合巻本になると、表紙全體が華美なものとなつた。

黄表紙を彩色摺の袋に入れて賣出した事もある。新版桃太郎（朋誠堂喜三次撰、安永六年江戸版）の袋入が其の最初であるといはれてゐる。

彩色を自由に且濃厚に施した錦繪は、安永・天明年間鈴木春信の頃からはじまつた。

赤本・黒本・青本・黄表紙の刊行期は、概して定期と臨時との二種ある。前者は新春の讀物、年玉用として歳末から春にかけて發行された。又後者は際物として、突發事件などのあつた時新聞の役目を以て、短時日の中に刊行されたものなどである。又賣物としてのものと、化粧品店等の景物品としてのものがある。

以上草双紙の版元は殆んど皆江戸である。

童幼の愛書慾は、まづ行成本によつて一時の満足が與へられた。次いで赤小本・雛豆本・赤本・黒本等と、或は表紙の色彩を變へ、或は體裁を變へて、其の感興を起さしたものである。其の頃は繪が主で文が従であつた。それが慾求の進むに連れて、漸次文が多くなつて來た。即ちけば／＼しい表紙などからの感興よりも、内容の面白さを望

むやうになつて、落着いた青表紙の青本へと移り、其の内容も讀み物化した。そして従來はお伽噺や怪談が主であつたのが、實録物・教訓物へと取材の對象が進んだ。然しまだ童幼の讀み物としての内容を保つてゐたが、嘗てそれ等の赤本や黒本によつて教養された子供が、大人へ成長した連中の懷舊慾も手傳つて、同じ體裁を借りて大人向きの作品が欲求されるやうになつた。斯くて安永四年に、大人の慰みの讀み物を加味した當世の洒落や、滑稽諧諷が盛られた黄表紙「金々先生榮花夢」(變用春町)が刊行されて好評を博した爲に、遂にこれが黄表紙出版の流行を確定的にした。それから其の内容も大人向きの取材が盛んになり、(恰も従來の黒本・青本が出現した時に、赤本が次)數年を出でずして全く黄表紙刊行の時勢となつた。

黒本の發生は延享元年、青本の發生は延享二年で、其の間僅か一年の相違であるといはれてゐる。また出版元で同一内容のものと同時に黒表紙にも青表紙にもし、又黒本で出したものを翌年青本仕立にして再版したものもある。

黒本・青本の隆盛になりかけたのは、まづ寶曆に入つてからである。明和末から安永中頃までは青本が盛んに刊行された。

安永・天明頃の黄表紙は滑稽・洒落・時事諷刺が主となつて、當時の社會描寫に力を盡してゐる。

黄表紙の主な作者は、懸川春町、市場通笑、朋誠堂喜三二、芝全交、唐來三和、山東京傳、十返舎一九、式亭三馬などである。

其の後松平定信の寛政改革の影響を受けて教訓物と變り、また實録物(眞中敷)の描寫が流行するに及んで、作意の中心が筋の變化に移つた。短篇から長篇へと展開したのも之が爲である。この指導者は南柚笑楚滿人であつたが、従來の作者も之に従はざるを得なくなつた。

長篇になるに及んで不便なのは、薄つべらな本が澤山で一編をなす事であつて、紛失の恐れも多い。そこで其の防止策として考案されたのが、數冊を一緒に纏めて綴ぢる事である。(即ち合本、合冊、合綴する事である)これは十返舎一九が最も早く實行したが、其の後式亭三馬の作品「雷太郎強惡物語」(歌川國圓畫、文化三年刊)を十卷合二冊にしたのがたま／＼好評であつたのと、其の後三馬の宣傳上手とによつて、後世この書を以て合巻の初めと誤稱されるやうになつた。この頃から黄表紙の刊行はだん／＼衰へ、時勢につれて合巻の流行と移り變る。

合巻本の内容は、末期の黄表紙の系統を引いて、實録體のものが主で、讀本に近いが、演劇の影響を受けて、其の上演脚本を讀物化したものも少くない。山東京傳・曲亭馬琴・十返舎一九・式亭三馬・南袖笑楚滿人等は、黄表紙以來ずつと著作を續けてゐるが、合巻本の時勢になつて初めて出た作者は、山東京山・柳亭種彦・東西庵南北・東里山人・墨川亭雪磨・柳下亭種員・笠亭仙果等である。就中柳亭種彦は最も光つた作家である。

柳亭種彦は、三十八編百五十二冊の「修紫田舎源氏」(歌川國圓畫、自文政十二至天保十三年刊)の長篇を發表し、合巻作者として名聲をほしいま／＼にしてゐる。この種彦を中心にした頃が合巻本の全盛を極め、彼の死後の天保末からは、下り坂となつて幕末に及んでゐる。

草双紙も黄表紙以前は、作者と畫者とが殆んど同一人であつた。この事は黄表紙・合巻本に移つた後も見られる現象であるが、漸次に作者は作、畫者は畫と分業になつた。作と畫と兩道が出来る者であつても、畫は他の畫者に播かせることゝ状態であつた。之は配役の宜しきによつて、讀者の感興をそゝらせようとする版元の商策によるものであらう。

黒・青本時代の畫者は鳥居清濤・鳥居清經・富川房信（吟雪）、黄表紙・合卷時代の畫者は鳥居清長・北尾重政・北尾政美・喜多川歌麿・歌川豊國・歌川豊廣・歌川國貞等が光つてゐる。作並に畫者としては戀川春町・山東京傳（畫者號北尾政演）、十返舎一九等が優れてゐる。

草双紙の取締に關する幕府當局の處置はかなり厳しかつた。黄表紙に就いては、寛政元年刊行の「世直大明神 金堀之由來」水鏡（石部琴好作、北尾重政畫）が、佐野田沼殿中双傷一件を取材した爲に絶版を命ぜられ、作者は手鎖の上江戸拂、畫工版元は過料に處せられた。又文化元年刊行の「化物太平記」（十返舎）は、當時の禁令「壹枚繪草紙類、天正之頃以來之武者等名前を顯はし畫き候儀は勿論、紋所合印名前等紛數認め候儀も決して相致す間敷候」といふに觸れて絶版を命ぜられ、作者は手鎖版元は過料に處せられてゐる。

噺 本

噺本の刊行は元和から幕末に及び、其の間二百四十餘年に亘り、五百七十餘種に上つてゐる。

お七等元 噺本とは落噺ばかりを採録した本をいふ。落語は既に古典文學中に其の數々が現はれてゐる。殊に能狂言中にはそれが多分に含まれてゐる。ところが文化の進むにつれて、落語のみを集め噺本としての典型を作るに至つた。

噺本の體裁は、初期のものは其の形が縦本も横本もあつて、其の大きさも種々であるが、後世のは概ね半紙四つ折の大きさである。また殆んど草双紙の形式そのまゝのものもある。紙數も一定してゐない。冊數も初期の作品には二冊乃至五冊なのが多いが、後期になると一冊ものが多く刊行された。

者である。

讀本

讀本よみほんは繪本に對する名稱である。故に假名草子・浮世草子なども讀本には違ひないが、これを狹義に取つて、支那の小説類から暗示を得て彼我の史實・怪異說話等を主材とし、漢文句調或は雅文擬古體の文章を以て、歴史人物や浪漫的架空事件を描寫し、勸善懲惡などの倫理道德觀を標榜ひょうぼうしたものを讀本といふ。それらの書の刊行は、寛延の初め頃から幕末まで百十餘年に亙り、約八百種に上つてゐる。

讀本は一種の理想小説であつて、現實に即して個性・性格を描寫するものとは、其の趣を異にする。

讀本の體裁は、概ね半紙二つ折の大きさである。又美濃二つ折或は中本形（美濃四つ折の大きさ）のものもある。冊數は少きは一冊ものから、多きは「南總里見八犬傳」の百六冊に及ぶものもある。挿繪は多いものもあるが、概して毎冊四枚乃至六枚位である。口繪は初期の作品には無いが、「忠臣水滸傳」の刊行された頃から、初冊の冒頭に挿入されるやうになつた。

讀本の中にも、「大壺舞花街始」（式亭三馬撰、文化七年江戸版）は讀本と合巻本とを折衷し、又「勢田橋龍女本地」（柳亭種彦撰、文化十年江戸版）は、讀本と淨瑠璃丸本とを折衷した新案のものもある。

刊行された讀本で最も古いものは、「古今（はなご）英草紙」（近路行者撰、寛延二年大阪版。作者は支那小説「勸燈新話」・「古今奇談」である。其の後に刊行された「西山物語」（繪部綾足撰、明和五年大阪版。本）、「本朝水滸傳」（繪部綾足撰、安永二年江戸版。本書は江戸で出た讀本の最初といはれてゐる）、「雨月物語」（上田秋

酒落本は、享保から嘉永に至る百二十餘年間に亙つて刊行され、四百三十餘種に上つてゐる。(然し普通には書賣場から刊行されたものとされてゐる)

酒落本は浮世草子の系統を引いた遊里文學である。作者等は吉原・深川などの遊里社會を描寫するに洒落滑稽を以て蔽ひ、街學的臭味あるによつて酒落本と稱したのである。

酒落本は漢學の素養ある人々の餘技として、遊里の細見から發生したものである。従つて其の體裁に、半紙四つ折、美濃四つ折、半紙二つ折、以上三種類の大きさに分けられる。そして最も典型的なものは半紙四つ折形である。

(酒落本は其の大きさに變を取つて、(重刊本文は油摺本などともいふ)。後に至つては或は半紙本形、或は道中案内記を摸した横本形等が出現した。

初期の作品には、漢文體或は和漢文體のものが多く、後には我が小説史上特筆すべき會話體が流行した。

酒落本の紙數は一定しない。概ね一冊を以て讀み切りとしてゐる。時には數冊に及ぶものもある。挿繪は全然無いものと、一冊に一・二枚あるものと、或は數十枚に及ぶものがある。(初期の作品には略畫が多いが、後期のものには密畫が多い)。

酒落本は、其の初期に於ては上方でも刊行された。それが文藝東漸の趨勢と、江戸人の氣風に投じた事によつて、遂に東都の獨壇場となつた。そして其の最も盛んに刊行されたのは、安永前後から享和の間である。この期では川柳・狂歌・黄表紙等の文學書の出版と相關聯して加速度に發展したのである。

酒落本の最初をなせるものは、「詞兩巴扨言」(宇垣先生撰、鳥居清信畫、享保十三年刊)である。其の後に刊行された、「雪月花」(可憐撰、享保七年大阪版。本書「遊遊部」の別名があつて、酒落本の始祖と稱されてゐる)。「北異素六帖」(無々道人撰、寛政)。「遊子方言」(多田一撰、明和)。「大阪遊類編の遊里を寫したものである。享保十三年には其の續編「列仙傳」が出版された)。「甲驛新話」(風鈴山人撰、安永)。本書出で、大に行はれ、江戸酒落)、「辰巳の園」(勝中放人假言撰、明和七年江戸版。遊子方言)。が吉原の事を書けるに對し、「甲驛新話」(四年江戸版。風鈴本の節を作つたものといはれてゐる)。本書は深川の事を寫した始めである)。

山人は四方山人の御號、「當世とらの巻」(田邊金魚撰、安永七年江戸版。本書一名「裂袴真虎の巻」といひ、普通の洒落本とく)「眞女意題」(森羅萬象元年江戸版。本書は森羅萬象(本草家森島中良)が洒落本の初作である。芝神明齋と)「富賀川拜見」(蓬萊山人隨筆撰、天明二年江戸版。作者歸處は安永天、いふ處で、芝神明齋歸處所を推察するに滑稽の筆致を以てし、後の洒落本を誘引した)「遊里故契三三姐」(山東京傳撰、天明七年江戸版。本書は吉原・深川・品川の遊女である)「石塙辰巳婦言」(式亭三馬撰、天正十一年江戸版。本書は三馬の傑作である。遊女が輕薄で裏裏をかへすが如き手段を弄する状態を描寫し、亦よく三馬の皮肉性を現はしてゐる。本書は其の後編を「船頭」、「船頭」といひ、第三編を「船頭御座」といひ、洒落本にして再三編續續せるもの、始めである。以て洒落本の本色が漸く失はれようとするを見るべきである)、「美妓離の花」(鼻山人撰、文化十四年江戸版。本書は外形こそ洒落本なれども、内容は全く人)などは、洒落本の代表的若しくは特色のあるものである。

松平定信が老中となつて寛政改革を行ふに當り、寛政二年十月猥がましい書物の出版を禁止する町觸を出した。然るに書肆鳶屋重三郎は山東京傳作の洒落本「手段手段 娼妓絹簾」(其の巻)、青樓畫錦の裏」(大巻 風俗 仕懸文庫)の三書を教訓讀本と偽つて寛政三年に刊行發賣した。これが忽ち發覺して、作者・版元等は夫々處罰され、右三書は勿論從來版行の洒落本も悉く絶版を命ぜられた。これより洒落本作者として鬼才を振つた山東京傳は、洒落本への筆を絶つに至つた。然しこの法の威嚴も數年を出でずして昔にかへり、又洒落本が出版されるやうになつた。が既に作者も作品も凋落し、昔日の如き鋭い穿ちの描寫の妙味はすたれて、心理描寫・實情描寫の流行に轉じ、遂に人情本へと展開した。

人情本

人情本は洒落本から段々轉化したものである。そして幕末まで約五十年間に互つて刊行され、三百十餘種に上つてゐる。

人情本は、江戸の文化が爛熟頽廢した時代の要求に應じて、遊里・市井の戀愛生活を描寫したものである。そしてそれは道義的觀念に捉はれず、只戀愛の爲に泣いたり泣かせたりするのが、浮世の人情として描かうとしたものである。

人情本の體裁は、洒落本の型の中で中本形(美濃四つ折の大きき)を繼承してゐる。紙數は普通一冊二十枚前後である。冊數は概ね二冊乃至十五冊であるが、（正史）いろいろは文庫(四巻)は十八冊(四巻)に及んでゐる。

口繪・挿繪は浮世繪師の筆に成り、密畫で濃艶なものである。

人情本の最も盛んに刊行されたのは、文政七年頃から天保末年に亙り約二十年間である。そして極めて少數の上
方版もあるが、殆んど皆江戸版である。

人情本の特色を具備した最初の刊行本は、「清談峯之初花」(十返舎一九撰、前編三冊文政三、後編三冊文政四、四年江戸版)である。其の後に刊行された、「契（お）情肝粒志」(鼻山人撰、英齋泉壽等譯、文政八至十年江戸版、本書は洒落本「胡蝶庵主人撰、曉鐘成」を人情、小三かまじり、金五郎假名文章娘節用「曲山人補綴並書、天」)、「老樓志」(胡蝶庵主人撰、曉鐘成、爲永春水撰、柳川重信、阿豆山雲、天保三、四年江戸版、本書出で、春水)、「正史(爲永春水撰、天保七至永元年江戸版、本書の體裁は人情本なれども、題材を史實に採り讀本的である)」など、人情本の代表的若しくは特色あるものである。(保元至五年江戸版)

水野忠邦が天保十二年に改革を斷行した際、人情本も風俗上に害あるものと目し、町奉行より市中取締三廻へ、人情本目録及び版元の書上げを命じ、翌十三年六月人情本作者爲永春水を手鎖の刑に處した。そして版元は過料に處せられ、從來出版の人情本版元は沒收の上燒棄せられた。これが爲に春水は自暴自棄となつて其の年七月十三日に病歿した。其の後間もなく幕府當局の取締も弛んだが、最早優秀な作家もなくて、人情本の凋落となつた。

人情本には、洒落本を人情本仕立に改装して改題し、或は文章の前後を補綴して出してゐるものゝあることを附言して置く。

俳 書

俳書は江戸時代を通じて刊行されてゐる。

俳書とは俳諧書及び俳文書を併稱したのである。俳諧は俳諧（滑稽の義）の連歌の略稱で山崎宗鑑（犬筑波集の撰者・菟木田宗武（俳諧千句の獨吟を試みた者）の創めたものとされてゐる。江戸時代になつて、松永貞徳出で、から「新増犬筑波集」。「御傘」を著はし、俳諧は非常な勢を以て興隆し、遂に連歌を壓倒して獨立した一文藝となつた。然し貞門の俳諧は技巧歌酒落に終り、且つ法式も煩瑣であつた。こゝに於て西山宗因は、法式に拘泥せずして洒落奇抜滑稽な句風を創めた。これを談林派といふ。門下には後に浮世草子の創始者たる井原西鶴などが居た。かくて延寶末年頃には、貞門の俳諧を歴して談林の全盛となつた。がこの時既に俳諧をして文學價值に富むものたらしめようとする機運が動いてゐた。斯くて起つた松尾芭蕉は、彼が高潔風雅な性格と、不斷の努力工夫とによつて、藝術の香高き正風體を樹立した。其の門下には榎本其角・服部嵐雪・向井去來・内藤文章・森川許六・各務支考等の俊秀な士雲集して、俳諧の絶頂期を形成した。其の集には有名な「七部集」が刊行された。また芭蕉の俳文「甲子吟行」「卯辰紀行」「奥の細道」等も刊行された。芭蕉の死後は門弟等互に異を立て、四分五裂し、遂に俗化して享保・寶曆の間は墜落を續けた。

然し目覺める時は來た。明和に至つて江戸に炭太祇出で、新調を唱へ、人事を吟じて洒脫な趣を示した。安永・天明の交には京都に與謝蕪村出で、古典趣味と優雅な情趣とを取入れた客觀的描寫法を以て、印象鮮明な句を作り、天明の新調を創めた。其の門下に高井几童が出た。當時は江戸の大島蓼太・加舎白雄、伊勢の三浦釋良、加賀の高桑蘭更、尾張の久村曉臺などが居て誠に多士濟々、天明の俳壇を飾つた。横井也有もこの時に出で、其の俳文集「鶉衣」を刊行した。其の後江戸の成美、蓼太門下の完來、信濃の二茶、蕪村門下の月居などが出て、文化・文政の頃まではなほ俳壇に活氣があつた。それから遂に振はず、

天保の月並調となつて幕末に及んだ。

俳書の刊行も俳諧の流行に伴つてゐる。即ち其の最盛期は元祿を中心として其の前後に互り、其の次は天明調の新俳風時代である。

俳書の體裁は美濃紙二つ折或は半紙二つ折の本が多い。其の他横本又は半紙四つ折の本もある。紙數は一定せず。冊數は一冊乃至五冊なのがが多いが、中には十冊以上に及べるものもある。また俳畫の挿繪あるものも往々ある。

刊行された俳書の古いものでは、古活字版の大形本「無言抄」(蘭應其撰、古活字版「醫長」などがあつた)などがある。其の後のものでは、大形本「狗狛集」(松江重頼撰、寛文十年頃京都版)、同書には横本(寛永二十二年)もある。中形本「俳諧本」(井原西園撰、天和三年頃大阪版)、「猿蓑」(去來、

元祿四年)など無數にある。又雑俳(其の前句附は後世の川柳を生んだものである)の刊行書には、「咲や此花」(靜竹密菊子編、元祿五)、武玉川「寛文三年より寶曆六年までに十篇を用ひ、その後改題して「燕都校折」といひ、合計十八篇、江戸版)など多數ある。これ等は何れも小本であつて、後の柳樽等の本はこれ等の形式に據つたものである。

俳諧書も江戸の盛運期(文化・文政を)までは上方で刊行されたものが多い。そして俳書には自纂自費出版もかなり多い爲に、出版地が廣く諸方に互つてゐる。

柳 書

柳書(川柳の本)は徳川時代の後期に出た一つの文學書である。

川柳は前句附の一轉したものである。そして世慮の缺陷・人生の弱點を穿ち、奇抜な着想で洒落滑稽を詠出する一種の短詩

である。其の形式は俳句と同じく五・七・五の十七字を通例とする。(七・七・五字、或は五・七・七字などの句のあるのは其の例外である)。其の俳句と異なる所は、川柳には切字まじりもなく、季にも拘泥しないことである。

附合の中から佳句を選集した「武玉川」（武玉川、燕都枝折）の出た頃、前句附の點者として名高い柄井川柳が居た。川柳はこの人の點をした句であるといふので、其の流を川柳と稱するのである。

柳書の體裁は半紙四つ折の大きさで、一頁に八句乃至九句位づゝ主に平假名書きにし、紙數概ね三十枚乃至五十枚の小冊子である。そして何れも江戸の出版である。

初代川柳が前句附の點者をしてゐる時に作つた半紙刷の萬句合（寶曆七年から寛政元年に至る）の中から、附句のみで巧みに人生の弱點を捉へ、皮肉な諷刺を試みたものを選集した「俳柳樽」初編が明和二年に刊行された。それより天保十年に至

るまで百六十六編が刊行された。當時又「柳多留拾遺」、「末摘花」、「やない筈」、「藐姑柳」、「柳どり」、「俳風玉柳」など同様の小冊子も出版され、後には「新編柳樽」も年々續刊された。

五代川柳に至つて天保の改革に遭ひ、風俗上有害と認められたものは嚴重に處罰された。（現存せる奥本中には、數時創句）それからは川柳も心學を旨とした風調に改め、教訓を主眼とするやうになり、興味索然たるものとなつて、僅かに餘喘を保ちつゝ幕末に及んだ。

狂歌狂文書

狂歌の書も江戸時代を通じて刊行されてゐる。

狂歌は其の當時の俚言俗語を以て、滑稽諧謔を主とした短歌である。室町時代に入つて狂歌を弄ぶ者が次第に多くなり、「七

十一番歌合」「調度歌合」「永正歌合」などが出た。江戸時代になつて、雄長老は「新撰狂歌集」を作り、松永貞徳は「貞徳狂歌集」を作つた。其の門人半井ト養は「卜養狂歌集」、石田未得は「吾吟我集」を著はした。その他に生白堂行風の編した「古今夷曲集」など、數多の狂歌の本が徳川初期に刊行された。狂歌は其の後衰へたが、安永に至つて再び流行し、天明に及んで全盛時代となつた。其の時代の有名な狂歌師に唐衣橋洲、四方赤良、朱樂菅江などがゐた。そして幾多の狂歌書が刊行された。文化・文政の頃には鹿都部眞顔、宿屋飯盛が群を抜いてゐた。其の後は遂に榮えず、天保以後は僅かに餘喘を保つのみである。

狂歌書の刊行も狂歌の流行と其の消長を共にしてゐる。即ち其の最盛期は天明時代である。狂歌書の體裁は美濃紙二つ折或は半紙二つ折、美濃紙四つ折或は半紙四つ折の大きさのものなどがあるが、概ね半紙本が多い。その他横本も袖珍本もある。又稀に両面摺のものもある。紙數は定まらない。冊數は一冊乃至三冊なのが最も多く、稀には「狂江戶名所圖會」(天明老)の十四冊に及ぶものもある。狂歌の本には挿繪のあるのが多く、其の圖柄は密畫も略畫もある。

狂歌の刊行書の古い物は、「新撰狂歌集」(雄長老撰、元)がある。其の後のものでは、「吾吟我集」(石田未得撰、慶安年間京版)、一古今夷曲集」(生白堂行風撰、寛文六年刊。又、元禄五年版も元文五年版もある)、「精犬百人一首」(寛文九)、「卜養狂歌集」(半井ト養撰、慶長川、師貞畫、延寶年間刊)、「精貞徳狂歌集」(松永貞徳撰、天明三年刊)、「萬載狂歌集」(四方赤良「大田」編、天明三年江戸版)、「故泥馬鹿集」(朱樂菅江編、天明五年江戸版)、「狂歌文庫」(宿屋飯盛「石川雅望」編、天明年間江戸版)、「狂歌二妙集」(唐衣橋洲撰、天明三年江戸版)など多數にある。

狂歌師は又狂文も作つた。作者として優秀な者に、蜀山人(大田)、「手柄岡持」(手柄)、「宿屋飯盛」(六樹園とも號す、鹿都部眞顔(狂歌老又は四方歌垣鹿頭と)などがある。また十返舎一九、式亭三馬なども狂文を能くした。それ等の人々の手になる有名な狂文刊行書に、「しみのすみか物語」(宿屋飯盛撰、文、化二年江戸版)、「四方のあか」(蜀山人撰、文、化五年江戸版)、「吾婦那萬俚」(宿屋飯盛撰、文、

「わがおもしろ」(手摺圖詩撰、文、政元年江戸版)、「四方の留粕」(蜀山人撰、文、政二年江戸版)などがある。

以上各種の文學書の他にまだ隨筆・紀行・滑稽・歌曲などの刊行書がある。これ等の刊行も江戸の初期から幕末に互り、時の流行に連れて浮沈してゐる。

隨筆本

隨筆本は平安朝時代の「枕草紙」、鎌倉時代の「方丈記」、南北朝時代の「徒然草」などが、江戸時代になつて古活字版や整版に起された事は既に述べた。

徳川期の知名な學者文人の多くは隨筆を書いたのであるから、それ等の刊行書も多數に上つてゐる。就中「螢雪餘話」(香月翁撰、本保十二年刊)、「駿臺雜話」(筆直清撰、寛延三年刊)、「秉燭譚」(伊藤長風撰、寶曆十三年刊)、「兼葭堂雜錄」(木村興撰、安永七年刊)、「玉勝間」(本居宣長撰、寛政六年至十一年刊)、「好古日録」(藤井貞幹撰、寛政九年刊)、「閑田耕筆」(仲富強撰、享和元年刊)、「燕石雜誌」(曲亭馬琴撰、文化七年刊)、「花月草紙」(松平定信撰、文化十一年刊)、「還魂紙料」(柳亭種彦撰、天明七年刊)、「用捨箱」(柳亭種彦撰、天保十二年刊)、「筆のすさび」(若澤帥撰、安政三年刊)などは有名である。これ等多くは江戸版であつて、美濃形若しくは半紙形の本である。

紀行本

紀行本の刊行も多數に上つてゐる。就中「東海道名所記」(藤井了庵撰、寛政元年京版、大本)、「吾妻紀行」(谷口直以撰、元祿四年京版、中本)、「更科日記」(菅原孝親女撰、元祿十七年江戸版、中本、元祿十年版もある由、この著作は平安朝である)、「十六夜日記」(阿保尼撰、元祿年間版、大本)、「諸州めぐり」(貞原篤信撰、正徳三年京版、小本)、「歸家日記」(井上

撰、正徳六年、「菅笠日記」(本居宣長撰、明和)、「藩園」東遊記「藤南翁撰、寛政七至九」、「藩園」西遊記「藤南翁撰、寛政七至九年京・大阪版、中本」など是有名である。(「転行本は整版のものばかりで、古活字版のはない。')

滑 稽 本

滑稽本の刊行は寶曆末年頃から起り、享和頃から盛んとなり、文化・文政頃は其の全盛期に達した。そして天保以後は段々衰微してしまつた。(滑稽本には往々上方版のものがあるが江戸版のが最も多い。)

滑稽本は滑稽を主とした文學書である。そして寶曆頃流行した談義物や洒落本から轉化したものである。

滑稽本の體裁は、概ね糊入みよし紙半截の中本(半紙形本と中本との間の大きさ)である。然しこれ以外の體裁のものも少くない。挿繪は當時の浮世繪師の筆に成つたものが多い。

滑稽本の俑をなしたものに、「根南志具佐」(天竺道人「平賀源内」撰、前篇寶曆十三年、後篇明和六年江、戸版、牛紙本、教訓の意をはなれて滑稽を専らとしてゐる)、「田舎芝居」(風來山人「二世」撰、小本。洒落本の體をはなれて田舎芝居の可笑味を書いた。其の序文は京傳を怒らせたものだといふ)などがある。其の後のものに、東海道中膝栗毛(十返舎一九撰、栗水口書、享和二至文化六年江から獨立して人氣を博す)、「街道綾線戯」(咲山山人撰、文、化三年大阪版)、「浮世風呂」(式亭三馬撰、北川英丸等書、文化六・九・十、文政三年江戸版、中本。三馬一夕歌川體にした最初のものである)、「街道蛙のあゆみ」(鶴亭美山撰、合川亭珠和、文化六年京版、中本)、「新編浮世床」(式亭三馬撰、歌川國直畫、世人にもてはやさ、市中、文化八年京版、中本)などは、滑稽本の代表的若しくは特色あるものである。

歌 曲 本

歌曲の文學書も、江戸の初期から幕末にかけて始めて刊行され、其の種類も體裁も多様多様に亘つてゐる。

我が聲樂には語り物と語り物とがある。歌曲とは之を狹義にとつて語り物を稱するのである。よつて幸若舞・論曲・淨瑠璃などの語り物は歌曲の中に入れてない。

江戸期の歌曲は地唄(三味線の本曲としての小唄の發達した上方唄)と、享保以後劇場に用ひた江戸長唄(芝居長唄)との、大きな二流がある。その他民謡・地方唄や色々な流行唄もある。それ等のもが中本・横本・小本などに綴ぢられ、流行を遂うて刊行されたのが澤山にある。

歌曲の古いものでは「萬歲躍」(寛治三年京版、半紙本。踊り)、「長歌古今集」(天和二年刊、遊女の委締の上に吉原で流行した歌二十二首を配してある)などがある。元祿・寶永頃に於ける上方唄を集めた刊行書には、「松の葉」(秀雄軒編、元祿十一年京版、半紙本)、「松の落葉」(大木蘭道編、寶永元年京版、半紙本)、「若緑」(靜菴閣主人編、寶永三年序、京版、半紙本)などがある。また江戸長唄では「京鹿子娘道成寺」(寶曆三年江戸版、半紙本)、「女里彌壽豊年藏」(寶曆七年刊、めりやすと發達の江戸長唄と合計七十五首收めてある)など數多ある。

西洋活版印刷術が本木昌造の努力工夫によつて成功し、我が印刷界に新生面を開いたのは明治初年頃からである。従つてそれが日本文學書の刊行に用ひられるやうになつたのは、其の後であるからこゝには述べぬ。



昭和八年十月二日印刷
昭和八年十月七日發行

日本文學講座 第一卷

編纂者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

發行所 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座 東京八四〇二番

電話芝(43) 自一一二一番
至一一二四番

(兩角紙本)